

明治期における清詩受容について

—— 同時代の文学として

水津 有理

2007年1月17日から20日まで、四日間の日程で行われたロンドン大学東洋アフリカ研究学院とお茶の水女子大学との共同ゼミは、「近世近代の日本における中国」(China in early modern and modern Japan)と題されたセッションで幕を開けた。筆者は、このセッション1において、お茶の水女子大の和田英信先生、SOAS 訪問中の池澤一郎先生に引き続き、「明治における清詩の流行」というテーマで発表を行った。発表後は、池澤先生、Drew Gerstle 先生をはじめ、セッションに参加された方々から多くのご指摘、質問をいただいた。本研究は、明清の中国詩学を専門とする筆者にとっては取り組みはじめばかりの新しいテーマであり、普段は交流のない日本文学などの分野の諸先生方、またSOASの大学院生の方々からいただいた指摘は今後研究を進めていくうえでいずれも非常に貴重なものとなると思う。以下に発表の詳細について報告する。



報告者の発表風景

1 はじめに

日本の明治時代(1869--1912)はほぼそっくり清朝末期にあたる。中国で二千年以上にわたって続いてきた古典文学の体系が解体に向かっていくとき、洋学の流入によって衰退するかに思われた日本の漢詩文が量的にも質的にも「空前絶後の隆盛」(揖斐高「明治漢詩の出発」)をみたという事実は「明治文壇の奇現象」として早くから指摘されてきた。またこの時期、明治初年の詩壇をリードした森春濤(1819--1889)の主導によって清詩の大々的な流行があったといわれる。この

時期に熱心に読まれた清朝の詩人としてたとえば王士禎(1634--1711)などは清朝の比較的初期に属する詩人だが、陳文述(1771--1843)、張問陶(1764--1814)などは明治の漢詩人たちにとってほぼ同時代といってさしつかえないだろうと思う。また春濤以前の詩壇の領袖・大沼枕山(1818--1891)が称揚したのが南宋の陸游(1125--1209)をはじめ蘇軾(1036--1101)、黄庭堅(1045--1105)、范成大(1126--1193)、楊万里(1122--1206)など宋代の詩人であったことを考えると、漢詩人たちのまなざしは一気に六百年以上の時を越えて同時代の詩に向かったといってもよいのではないだろうか。

全体として衰退に向かう流れのなかで、日本漢詩が短期間非常な隆盛をみた(あるいはそのように見えた)ということ、また、その時期、ほぼ同時代のものである清人の詩が熱心に読まれ、学ばれたということはどちらも非常に興味深い文化現象であるが、その具体的な諸相について、とりわけ清詩がどのように受容されたのかについての先行研究は決して多くないように思われる。その中から幾つかを挙げるとすれば、揖斐高氏の「明治漢詩の出発——森春濤試論」、福井辰彦氏の「宮崎晴瀾と張船山——明治漢詩における清詩受容の一斑」、「森槐南と陳碧城——槐南少年期の清詩受容について」、「明治漢詩と王士禎——『新文詩』所収作品から」などがあげられよう。揖斐論文は江戸時代の漢詩隆盛から幕末・維新期の伏流期を経て明治の漢詩壇がどのように形成され、何がその趨勢を決めたのかについて主として森春濤の果たした役割について論じたもの、福井氏の論考は明治漢詩における清詩の受容について清詩と日本漢詩の比較を通じて具体的な影響、継承関係を論じたものである。また明治時代の漢詩についてはほかに、「近代文学としての漢詩」という視点から森春濤・槐南親子、漱石・鷗外・河上肇、永井荷風親子などの作品を論じた入谷仙介氏の論考がある。

本発表では、明治期の清詩の流行とその受容について、作品分析以外の視点から検証し、論じていくことはできないだろうかという問題意識のもと、その初期的作業として明治期の日本における清人の別集及びその

アンソロジーの出版状況について報告する。

2 明治における漢詩の隆盛

明治時代の漢詩の「隆盛」については、すでに同時代の詩人・評論家、大町桂月がこれを「明治文壇の奇現象」と呼び次のように述べている。¹

明治の世となりて、西洋の文學や、思想や俄に入り來たり。是れ未だ奇とするに足らず。小説面目を改めて勃興せり。是れ未だ奇とするに足らず。新體詩勃興せり。これとても奇とするには非ず。ただ廢滅するなるべしと期したる漢詩が却って盛んになり、且上手になりし事は吾人の不思議に思わざるを得ざる所なり。漢籍入りてより二千年、漢詩を作る伎倆の發達せること、未だ明治時代の如きものあらず。王朝時代には、漢學に達したるものは多かりしかど、漢詩はきわめて幼稚にして、一人も詩人らしき詩人なく、一篇も誦すべき詩なかりき。後世、文學の神と崇むる菅公の如きも、白樂天の淺薄なる模擬者に過ぎず。その餘、推して知るべきのみ。その後、漢學なく、漢文なく、漢詩なきこと久しかりしが、足利時代に至り、僧侶の支那に往來するもの少なからざるに及びて日本また詩あり。否、徳川氏の末に至るまでも、絶海の如きは、幾んど之なからむ。その後徳川氏の元祿以後に至りて、唐詩の出來損ひもあり、宋詩の出來損ひもあり。菅茶山、梁川星巖などは、やや詩をよくせるものなり。西洋の文物文藝どしどし輸入せられて、行燈は洋燈と代る世の中に、その行燈の燈火減せむとして暫く明かなりとは、今の漢詩壇の謂か。明治二十年代は實に漢詩全盛時代なりき。

この指摘からは、西洋化・近代化の道を走り始めた明治時代、西洋の文学や思想がさかんに輸入され、新しい小説、新しい詩が勃興するにもなって衰退するかに思われた伝統的な漢詩が却って盛んになったこと、またその事実が、同時代の文人の眼にすら「奇現象」と映ったことがみてとれる。この現象は、具体的には果たしてどのようなものであったのだろうか。

たとえば木下彪はその著書『明治詩話』のなかで、江戸から明治にかけての漢詩文作者の広がりに着目して、次のように述べている。²

江戸時代から士大夫の文学に対して、庶民の文学即ち稗史小説浄瑠璃俳諧狂歌川柳などが発達して

来たが、寛政以後漢文が庶民階級にまで普及すると共に、庶民文学の影響を受けて平易化し遊戯化した漢詩文が、写實的傾向を以て現実生活に結びつき、広く士民一般の間に流行した。これが明治の世に其の儘引継がれたのみならず、寧ろ盛になって、一時に絢爛なる最後の花を咲かせたのであった。

3 清詩の流行と森春濤（1819--1889）

江戸末期から明治大正にいたる漢詩壇を論じる上で、もう一つ重要なのが清詩の流行である。それは、唐宋の詩人たちの作品を読み、さらに清人の詩も読む、といったものではなく、李白や杜甫、韓愈、白居易などはおいて何よりもまず清人の詩にむかう、といった状況であった。たとえば明治の漢詩人・野口寧齋は、清人の詩集を収集して「清詩萬卷樓」と名づけたうえ、自らの主宰する雑誌『百花欄』にその書目を連載して当時の人々の羨望を集めたという。³ こうした状況に対して近藤元粹は大阪の書肆・嵩山堂の求めに応じて評訂した『評註浙西六家詩鈔』（明治36年刊）の序文のなかで、いたずらに生硬で新奇な修辭をもとめる清詩の弊害を指摘しつつ、「わが国の詩学が大いに盛行するなかで、世の多くが清詩を好み、これを“新調”といつて誇っている。…いまの人はひたすら清詩を学ぼうばかりで、清の詩人たちが学んだ（過去の詩人たちの作品）を学ぼうとはしないのだ」（「方吾邦詩学大行、而世多嗜好清詩、称新調以相誇。…今人一意学清詩、却不学清人所学」）と述べているが、この一文からも、この時期、清詩がひとつの流行としていかにもはやされたかを読み取ることができるだろう。そして、このような清詩流行に中心的役割を果たしたのが森春濤であった。大江敬香は「明治詩壇評論」のなかで次のように述べている（以下引用文の句読点は筆者による）。⁴

明末清初の詩は殊に春濤に由りて紹介されたればなり。枕山固より明清の詩を説かざるに非ず。…然れともその本領は依然宋詩なり陸なり范楊なり。之を春濤の特に明清を説くに比すれば同日の論に非ざるなり。且つ夫れ詩は一旦社会より遺忘せられ（或る点に於いては唾棄せられ）たるの後新に之を承けたるものは春濤の一派なれば、新に就き旧を厭うの情に視るも、春濤の枕山に比して歓迎を受くるの素因あるや明けし。

茉莉巷凹處、詩に関し出版せしもの新文詩已外に

十数種あり。清廿四家詩、清三家絶句最も世に行わる清詩の江湖に伝播する実に春濤の力なり。…清詩流行の弊や後進の詩に志すもの袁趙而して朱王而して錢吳、之を外にして詩なしとし、李杜あるを知るも韓白蘇陸あるを忘るゝの徒を生したり。

この指摘をみると、明治時代の漢詩の流行が、江戸時代からとぎれなく続いて来たものというよりは、いったん「社会より遺忘せられ」たのち、森春濤による清詩の鼓吹によって再び何か「新しいもの」として息を吹き返したのではないか、と思わせるものがある。

4 和刻本の出版状況について —— 清詩のアンソロジーを中心に

これまで、明治期における漢詩の「隆盛」と清詩の流行について、資料をひきつつおおまかにみてきた。ここからは、明治において清詩がどのように受容されていたかについて、和刻本の出版状況を通じてその一端をみていきたいと思う。このころ、明治10年に来日し、大河内輝声や石川鴻齋など日本の文人たちと交流した初代の清国公使（欽差大臣）何如璋の『使東雑詠』（明治13年刊、参贊官・黄遵憲の『日本雑事詩』（同）、また明治16年に刊行された日本の漢詩人の選集『東瀛詩選』の編者をつとめた兪樾（曲園）の『曲園自述詩』（明治23年刊）をはじめ、多くの清人の別集が出版されているが、今回は別集ではなく、いわゆる総集、アンソロジーとして編集・出版されたものについてみていきたい。江戸中期から明治にかけて日本で出版された清詩のアンソロジーには次のようなものがある。

[江戸期]	
享保年間	『清詩選』
寛保年間	『清僧詩選』（『皇清詩選鈔』）
宝暦年間	『清詩選』（絶句鈔）全二巻 『清詩選選』十巻（『皇清詩選鈔』）
文化年間	『清四大家詩鈔』（『国朝四大家詩鈔』文化6年） 『清百家絶句』
嘉永年間	『清十家絶句』（嘉永5年、服部孝編輯、万青堂刻本 <上海>） 『清六大家絶句鈔』（→明治印、青木嵩山堂） 『浙西六家詩抄』
[明治期]	
	『清三家絶句』（三冊、茉莉詩店）

『清廿四家詩』（二冊）
『清詩佳絶』（三冊）
『清六家詩鈔』
『清詩別裁選』七巻 明治15年刊
『嘉道六家絶句』

このうち、『清詩選』『清詩選選』『清四大家詩抄』『清百家絶句』などは江戸時代に出版された多くのものが和刻本集成（総集）に収録されているほか、『清三家絶句』『清廿四家詩』『評註浙西六家詩鈔』などは国会図書館などに所蔵され比較的容易に見ることができる。

こうしてみていくと、清朝の詩はすでに江戸時代からさかんに出版されていたことがわかる。次に、明治時代に刊行された詩集から、『清三家絶句』と『清廿四家絶句』を選んでもう少し詳しくみていきたい。

『清三家絶句』は森春濤の経営する茉莉詩店から出版されたもので、当時「最も人の愛賞を受け、清詩鼓吹には大いに効果があった」といわれる。「清三家」とは、張問陶（1764--1814）、郭麐（1767--1831）、陳文述（1771--1843）の三詩人である。それぞれ165首、200首、174首をとり、計539首からなる。

『清廿四家詩』（二冊、明治十一年刊行）は、中島一男の叙によれば、そもそも北川雲沼が「清廿四家文鈔」という書物に倣って、「廿四家詩」の編纂を思い立ち、錢謙益・吳偉業以下二十四人の別集を購入し、また選者を二十四人選んで出版することにしたものであるという。

収録された詩人および選者は次のようなものである。⁵

巻之上

錢牧齋詩	北川雲沼選	吳梅邨詩	鷺津毅堂選
宋荔裳詩	鈴木蓼處選	施愚山詩	小長井小舟選
王漁洋詩	長三洲選		

巻之中

陳迦陵詩	神波即山選	董辛田詩	関雪江選
查初白詩	日下部鳴鶴選	厲樊榭詩	江馬天江選
巖海珊詩	長松秋琴選	趙秋谷詩	伊藤聴秋選
尤西堂詩	森春濤選	朱竹垞詩	広瀬青邨選

巻之下

蔣藏園詩	鱸松塘選	王夢樓詩	徳山樗堂選
趙甌北詩	小野湖山選	呉穀人詩	岡本黄石選
吳澹川詩	巖谷一六選	張船山詩	成島柳北選
陳碧城詩	永坂石埭選	郭頻伽詩	丹羽花南選
袁簡齋詩	大沼枕山選	錢籜石詩	野口松陽選
王穀原詩	谷太湖選		

5 結びにかえて

本発表では、明治期における「清詩流行」という現象を、和刻本の出版状況からみていくことができるのではないかという問題意識のもとに、その初期的な作業を行った。今後は、和刻本の序跋、および明治期に多く出版された漢詩文に関する雑誌などの資料を用いて、出版をめぐる具体的な経緯や、明治の漢詩人たちがどのように清詩を評価し、学ぼうとしたかについて調査していきたいと思う。またそれを通じて、明治時代の漢詩の「隆盛」というものが、ひとつの文化現象として如何なるものであったのかについて考察していきたい。

【 関 連 年 譜 】

明治 7年 (1874)	10月、森春濤東京に至り明清詩を鼓吹
〃 8年 (1875)	4月『東京才人絶句』二巻を刊行 7月『新文詩』創刊(～明治16年12月)
〃 10年 (1877)	清朝初の外交団来日(光緒3年) 遣唐使以来初の正式な国交、外国使節
〃 11年 (1878)	『清三家絶句』(三冊)刊行 『清廿四家詩』(二冊)刊行
〃 12年 (1879)	『清詩佳絶』(三冊)刊行
〃 15年 (1882)	『清詩別裁選』(七巻)刊行
〃 16年 (1883)	俞樾(曲園)編『東瀛詩選』刊行
〃 27年 (1894)	日清戦争勃発(～1895)
〃 36年 (1903)	『評註浙西六家詩鈔』六巻(近藤元粹評訂)
〃 40年 (1907)	『清六家詩鈔』(『評註国朝六家詩鈔』八巻、近藤元粹増評)
大正元年 (1912)	清朝滅亡

注

1. 木下彪(周南)『明治詩話』(東京文中堂 1943 <紀田順一郎編『近代』世相風俗誌集 8 クレス出版 2006 所収>、pp355-356による。
2. 前掲書 pp166-167。
3. 神田喜一郎「日本における清詩の流行」(『神田喜一郎全集』第八巻 同朋舎出版 1987 所収) 参照。
4. 大江敬江「明治詩壇評論」(『敬江遺集』1928 <神田喜一郎編『明治漢詩文集』明治文学全集 62 筑摩書房 1983 所収>)。
5. 辻揆一「明治詩壇展望」(『明治漢詩文集』明治文学全集 62 筑摩書房 1983 所収) 参照。

参考文献

- 揖斐 高「明治漢詩の出発 —— 森春濤試論」(ペリかん社『江戸文学』通号 21 特集・明治十年代の江戸 1992.12)
- 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』(研文出版 1989)
- 大江敬江「明治詩壇評論」(『敬江遺集』1928 <神田喜一郎編『明治漢詩文集』明治文学全集 62 筑摩書房 1983 所収>)
- 同 「明治詩家評論」(同上)
- 木下彪(周南)『明治詩話』(東京文中堂 1943 <紀田順一郎編『近代』世相風俗誌集 8 クレス出版 2006 所収>)
- 神田喜一郎『明治漢詩文集』(明治文学全集 62 筑摩書房 1983)
- 神田喜一郎「日本における清詩の流行」(『神田喜一郎全集』第八巻 同朋舎出版 1987 所収)
- 近藤春雄『日本漢学大辞典』(明治書院 1985)
- 近藤光男『清詩選』(漢詩大系 22 集英社 1967)
- 辻 揆一「明治詩壇展望」(『明治漢詩文集』明治文学全集 62 筑摩書房 1983 所収)
- 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録補正』(汲古書院 2006)
- 福井辰彦「宮崎晴瀾と張船山 —— 明治漢詩における清詩受容の一斑」(『国語国文』通号 812 2002.04)
- 同 「森槐南と陳碧城 —— 槐南少年期の清詩受容について」(『国語国文』通号 828 2003.08)
- 同 「明治漢詩と王士禛 —— 『新文詩』所収作品から」(『国語国文』通号 861 2006.05)
- 前田 愛「枕山と春濤 —— 明治初年の漢詩壇 ——」(『前田愛著作集』第一巻 筑摩書房 1989)
- 王 寶平『中国館蔵和刻本漢籍書目』(杭州大学出版社 1995)